

2016 年度産業情報研究所活動報告

朝日大学産業情報研究所では、昨 2015 年度より所報のリニューアルを行い、所内・学内の研究シーズを、地域産業・企業の方々の目に留まることを意識し発信するという構成に変更した。その試みは、概ね成功だったと思われる。というのは、意外なことに「紙媒体で欲しい」という声があちこちから聞こえてきたからだ。

昨今、インターネットの普及と経費節減のために、多くの学術雑誌や論文誌・研究紀要などが電子出版やリポジトリ掲載の形でダウンロード対応する一方、紙による出版と流通が少なくなる傾向にある。一方でこの産情研所報については、手に取ってそのまま流し読みできるという紙媒体の強みが、リニューアルした編集方針と合致したということなのだろう。

今回の特集としては、4 件の「経営学部の研究シーズ」を掲載した。本学部に所属する教員の日々の研究活動と取り組みを紹介することによって、“手に取っていただいた”方がすぐに活用できる、地域に貢献するブレインとしての期待に応えられる内容になっていると自負している。

本年度は、その他の大きな活動として、2 回の研究会を主催した。その内容は次ページ以降に報告する通りであるが、簡単にまとめておく。第 1 回研究会は、岩手県を中心として地域ブランドの創出を行っている大平恭子先生をお迎えして、瑞穂市の富有柿生産者を中心とした活発な議論を行った。第 2 回研究会は、朝日祭(大学祭)との連携企画として、主に瑞穂市の防災に関する企画を 2 日の開催期間に沿う形で行った。第 1 日目は棚橋敏明瑞穂市長をお招きして水害について、第 2 日目は岐阜大学の板倉憲政先生をお招きして災害後の心のケアについての講演を賜った。その他、所員によるシーズの紹介「連続講演会」も開催し、研究所の活動をアピールすることに努めた。

プロジェクト研究(萌芽)は、一般的な経営学とは異なる分野から、産情研の活動にふさわしい内容の応募があり、成果が見られた。このことは、本経営学部の研究の幅の広さを示していると共に、人材の奥深さを表しているとも言える。

本研究所長は 2017 年度より矢守恭子教授に交代することが内定しているが、今後とも地域と密接に関わり合う研究体制と、学部の研究シーズ発信に向けて、活動が活性化していくことを期待したい。

2017 年 3 月 31 日
朝日大学産業情報研究所 所長
畦地真太郎